観察（みる）

北海道地域農業研究所の原点

（社）北海道地域農業研究所　顧問　太田原　高　昭

一・「こんわ会」を立ち上げた橋場正一さん

北海道地域農業研究所は今年で創立二〇周年を迎える。創立にかかわり、所長を三期務めた者として、各方面でお世話になった多くの方々に厚く御礼申し上げ、これからも研究所を支えていただくようお願い申し上げたい。研究所になってからの実績とその評価については、現在二〇周年記念誌を編纂中であるのでそこに譲り、ここでは研究所の前身である「北海道農業農協問題懇話会」（以下「こんわ会」とする）について書いておきたい。

「こんわ会」が発足したのは昭和四七年であった。平成二年創立の地域農業研究所に業務を引き継ぐまで足かけ十九年、二〇周年を迎える研究所とほとんど同じ長さの歴史をきざんでいる。この会が生まれたのは、昭和四七年という時期が示しているように、米の生産調整（減反）政策にどう対処すべきかという差し迫った課題に答えるためであった。会を立ち上げたのは当時の北農中央会副会長の橋場正一さんである。

橋場さんは上川の東旭川農協組合長、すでにホクレンや北信連副会長など道連の要職を歴任し、遠からず農協道連のトップに座る人と目されていた。その橋場さんが札幌での役職をすべて辞退して一組合長として東旭川に帰ったのである。橋場さんはその時の心境を後に故事にたとえてこう書いている。「田園まさに荒れなんとす。なんぞ帰らざる」。当時の切迫した農業情勢と橋場さんの決意がよく表れている。

懇話会の事務局長として任命されたのが農業開発公社の幸健一郎さんだった。幸さんは、北生連時代に北農労の書記長として橋場さんとは団体交渉の好敵手であったが、いつしかお互いに認め合う関係になっていたようだ。幸さんの功績は、農協論の権威だった足羽進三郎北大教授に副会長をお願いしたのを始めとして、多数の研究者をこんわ会の協力者に引き込んだことで、その人脈が今日まで研究所の財産となっている。

しかしこんわ会の主力はあくまでも単協組合長だった。役所や系統の指示待ちでなく、自分たちの知恵と協同の力でどう難局を乗り切るかという熱意に燃えたすばらしいメンバーだった。端野の三好さん、富良野の藤野さん、洞爺の佐伯さん、恵庭の松原さん、中札内の梶浦さん、北檜山の大関さんなど、その後の農協界をリードしたそうそうたる人たちの、熱い語りに接した私たち若手研究者は何と幸運に恵まれたかと今でも思う。

課題であった減反政策への対応にはどのような答えが出ただろうか。かいつまんでしか書けないが「複合経営」というのがその答であった。東旭川農協で開催された第一回研究会の講師を務めた岩手大学の佐藤正教授が、自ら計画書を書いた岩手県志和農協の実績をふまえて「稲作経営の複合化」を説いた。今では当たり前になっている複合経営の考え方が、水稲単作で走ってきた当時の北海道では新鮮であり、衝撃的でさえあった。　こんわ会は、稲作地帯だけでなく畑作地帯や酪農地帯からも要請されて、生産調整が全面化していく時代の北海道農業のあり方について手弁当で調査研究し、現地研究会を開いて農家や農協職員と議論を重ねた。その中から畑作の地力問題とその対応策としての輪作体系の確立、酪農については「ゴールなき拡大」への疑問と「マイペース酪農」の意義などが課題として浮かび上がってきた。関係機関ではすでに検討されていた問題だったが、それを現場から戦略的な位置づけで提起したのがこんわ会の役割だったかと思う。

二．梶浦福督さんとの「連合会」論争

初代会長橋場さんは、思いを残しながらガンで急逝された。こんわ会はその遺志を継ぐべく活動を継続することになり、二代目会長に中札内の梶浦福督組合長を選出した。梶浦組合長は、すでに北海道にこの人ありと言われたカリスマ的リーダーで、中札内村も梶浦さんが重要な役割を果たした法人化運動や「循環農業」

で有名であった。私も大学院生時代から何度も中札内を訪れ、梶浦さんの教えを乞うていた。

こんわ会としては大変な大物会長に恵まれたのだが、梶浦さんの思いは別のところにあったらしい。梶浦さんは北海道共済連の会長として全共連の理事に就任し、そこで全共連事件というとんでもない不祥事に遭遇したのである。事件の内容は省略するが、梶浦さんは当時の全共連のボスとして君臨していた会長を正面から批判し、理事会総辞職といういわば抱き合い心中でボスの追放に成功している。

これは推測だが、梶浦さんはこの事件を通じて農協連合会に深く失望し、その存在自体に疑問を抱くようになったのではないか。こんわ会は連合会の下部組織ではなく、単協組合長の自由な勉強会だったから、連合会の役割や実態にメスを入れるための格好の足場になると考えたかもしれない。しかしこんわ会の目的はそういうところにはなかったから、お互いに違和感があったためか、梶浦さんは一期で会長を辞めている。

問題はその後にやってきた。梶浦さんはかねてからの連合会批判の研究を深め、その結果を『農協大改革案』（昭和六三年）という著書にまとめて発表した。それは「各種の農協連合会は害あって益なし。これを速やかに解散すべし」という衝撃的な内容で、マスコミにも大きく取り上げられた。しかし、どうしたわけか表だっての反論はなく、肝心の連合会も沈黙を守っていた。

私は農協の研究者としてそうした状況に不服であり、大恩ある梶浦さんだが一言なかるべからずとの思いで、『農家の友』に梶浦理論批判を書いた。連合会に頼まれて書いたと言う人もいたが、そうではない。ホクレンのある役員に「どうするんですか」と聞いたところ「無視することにした」との答だったため、誰かが言わねばとの思いで書いたのである。けしかけた人がいたとすれば『農家の友』の編集委員だった道の黒澤不二男専技、現在の地域農研特別参与の黒澤氏である。

烈火のごとく怒った梶浦さんは直ちに次号に反批判を執筆され、論争が始まった。といっても私は連合会の必要性を理論的、歴史的に指摘しておけば十分だったし、公開の場で大先輩と論争するのも恐れ多かったのであまり続ける気はなかった。それでも周りが面白がって、テレビや某農協青年部主催の直接対決討論会に出されたりした。マスコミ的には連合会を断罪する梶浦さんがヒーローで、私は敵役だったように思う。

梶浦さんが連合会不要論の実践として組織した「広域農協」は結局失敗した。いろいろ不運も重なったのだが、私はやはり必然の結果だったと思っている。梶浦さんは村を離れ東京で亡くなられたが、梶浦さんをもちあげたマスコミや大学教授はこのことでいまだに一言の釈明もしていない。この一連の経過は農協論の絶

好の教材なので、いつか誰かがきちんと客観的に研究してほしいと思っている。

仏様になられたから言うわけではないが、梶浦さんの連合会批判は真剣なものだったと思う。連合会の要職を歴任した人がこのような言動に出たことについて批判する人は多いが、そういう経歴の持ち主だからこそ言えることもある。よく使われる比喩でいえば、梶浦さんは産湯と一緒に赤子も流してしまったのだが、汚れた産湯を捨てなければならないことは確かである。とくに連合会の人は梶浦さんの本を警句として読んでほしい。

三．佐伯利彦さんの「共連れの思想」

三代目会長の佐伯利彦さんは洞爺村農協の組合長を十七年務めた人で、ホクレンの理事としても一〇年選手で、野菜作を普及した「佐伯学校の校長」として知られている。私は大学の助手になりたてから洞爺村に通い、佐伯さんの教えを受けて博士論文もまとめた。亡くなられた今も洞爺村方向には足を向けて寝られないほどお世話になった。

佐伯さんの偉さは、こんわ会が「複合経営」を打ち出す前から、自分の経営だけでなく地域農業のあり方として複合経営を取り入れ、野菜産地形成の先駆者となったことにある。十勝や空知と違って道南の洞爺村は畑作も稲作も小規模で、規模拡大を目指せば離農が増えざるを得ない立地にあった。佐伯さんは農業は「共連れ（友連れ）」の業であり、仲間は大小の別なくすべて生きながらえなければならないと考える人であった。

そのためには平面的な規模拡大ではなく、立体的な規模拡大すなわち複合化の道しかなかった。佐伯組合長は北海道で初めて構造改善事業による施設園芸の団地を造成し、生鮮野菜の内地送りに挑戦した。今のように条件が整っている時代ではないから、パイオニアとしての辛酸はたっぷりと味わった。事業が行き詰まり心が折れかけると東京に出たという。東京の雑踏を眺めていると「こんなにたくさんの人がいるのだから野菜は必ず売れる」という確信が生まれてくる。そして再び元気を取り戻して村に帰るのだ。

佐伯さんがホクレン理事に選ばれた頃は、系統の野菜事業は始まったばかりであった。佐伯さんはこんわ会仲間の三好さんや藤野さん、平取の楠木さん、七飯の宮後さん、橋場さんの後を継いだ東旭川の近藤さんたちと野菜の研究会をつくり、これが後に佐伯学校と呼ばれるのである。この人たちが北海道を代表する野菜産地を作り上げるのであり、ホクレンの野菜事業も急速に拡大した。こんわ会の複合経営論がついに系統事業に取り入れられ、北海道農業を変え始めたと言ってよいであろう。

こうしたことから佐伯さんがこんわ会の三代目会長に選出されるのは自然の成り行きだった。佐伯さんは道内初の広域合併農協であるとうや湖農協の運営で苦労しながらも、こんわ会の活動を大切にされた。それだけでなく、ちょうどガット・ウルグアイ・ラウンド農業交渉の最中だったこともあって、こんわ会の「手弁当」の伝統を生かしながら系統のシンク・タンクとなるような安定した組織にしたいと考えた。

ホクレン始め各連合会、中央会がこれに賛同し、行政の支援も得てスタートしたのが北海道地域農業研究所である。連合会、中央会だけでなく、単協および市町村の加盟を重視する社団法人となったのは、現地に密着したこんわ会の伝統を忘れないためである。

小さな研究所でもこれだけの歴史がある。創立者の橋場さんの遺稿集『大地に生きて』の中に、こんわ会に寄せて「最初に点した火は小さくとも、やがて燎原の火となる」という文章がある。燎原の火にはまだ遠いが「火を継ぐ者」の自覚を忘れずに、日々の業務に誠実に向き合いたいものである。